

## 8 学校と遊び

子どもをかしこく育てるために、学校や勉強の意味もわかったし、今の日本の子どもが三、四の川を渡っている状況であることもわかってきました。こうしたなかで学校の授業をおもしろく魅力あるものとするため、遊びをどうとり入れたらいいのか——という質問をうけることがよくあります。そうした質問者は、察するに授業に意欲をもってとりくんでおられる教育現場の先生方とおみうけしました。なかにはさすが先生方だなあと感心するやうに、「明日からすぐに役立つ方法を具体的に教えてください」というのにも遭遇します。抽象的で役立つない原理原則はもうききあきたということなのでしよう。たしかに立場をかえるなら、さもありなんです。それで、そうした学校の授業を進められるうえで、役立つような遊びのさまざまと、授業時間のなかで、教場、教室といった限定ある範囲のもとで、どのようにしたらよいのだろうかという具体例を、以下に述べてゆくこととします。

しかしその本論を述べる前に、得たりや応と熱心な姿勢を示され、活用してやろうとまち構えられる方々のために、どうしても述べておかなければならぬ二、三のことがあります。



## 大人がいると遊びにならぬ

その第一は、非情で皮肉でいやなことですが、学校や教室で教師の指示や教唆や参加で行なわれるものは、いかに形は「遊戯遊興的」であっても、子どもの「遊び」ではないということです。このことは保育との関係でもふれたところですが、学校関係の方にもしっかりと認識しておいていただかないと、これほど童心にかえってやっているのにか、こんなにも今様良寛様になりきってやったのにかという、悔悟やぐちとなって残ることとなるからです。

子ども達の世界から遊びが失われるようになったことをみかねて、学校ぐるみ遊びを復活復興させようと努力されているところをよく知っているし、そうした例にならってはげんでいる学級や学園も多くあることでしょう。それは結構有難いことです。それはそれなりの成果をあげ、教育的なよい影響を子ども達に与えているはずです。しかしこうした特定の場や時間帯、すくなくとも大人の管理責任状況下の行動は、「遊び」とはどうしても違ったものとなってしまふのです。

私はけっして子ども達だけのほうがよい成果をうみ、大人や教師が加わるとダメになってしまふと述べているわけではありません。本来的に、質的に違うものとなってしまふということを述べているのです。そして私たちが「遊び」という発想をいだくとき、単に場所や時間や人数の違いではなく、質的な根本的な差を、大人というものの存在、影響、管理の有無から生ずると考えているからにほかなりません。



「遊び」の良さや長所や効果は、子ども達の仲間という、自由な場で営まれるところにあります。もちろんそこには欠点や短所、悪弊もないことはありません。その長所だけを取り、欠点をまったくなくそうとすると、その欠点とともに長所も失われてしまいます。大人や教師が子ども達の仲間の一員になって、まったく同化したとしましょう。その遊びがいろいろな長所欠点をもつとき、その同化した大人は、その欠点にどう反応するのでしょうか。看過するのでしょうか、いっしょに純心無垢にかえって自由を謳歌するのか、心ならずも黙認するのか。大人が加わっていないがらそうしたことには許されません。世間とか、周囲とか、上長とか、PTAの目がうるさいということではなく、まったく子どもと同じようにさわいだり、悪戯をしているのなら、先験者、先達者として先に生まれ、大人であることの意味を、なにより先に本人が考えてみなければなりません。事故や非行や悪業が顕在化しないまでも、そのおそれがあり、そのおそれがあると思われるものが管理下にあり、責任下にあるとき、その該当者たる大人は、子どもと同一化してたのしんでいてよいはずはありません。見知らぬ子であっても、はじめての出会いであっても、救うべきときは手をさしのべ、たしなめ、警告すべきときはそうするのが大人というものでしょう。子どもの「遊び」の場に直接加わらないまでも、管理状況下にあるとき、それを放棄することは、自らの年齢を消去すると同じく、できないことです。

人によっては子ども達だけを自由にさせ、自分らはまるで空気のように、あっても無いのと同じ存



在で、そつとうしろにいて、温かく見守ってやるのだ——とおっしゃる方がいます。言葉や言いまわしはそれでいいとしても、現実的にはそれは大人のほうの独り合点であって、子どもの側からみるならば、いつも楽しもうとしている背後に、チラホラ見えかくれする怪しい影を無視できるものでもないし、すばやく盗み見したり、顔色をうかがったり、ときには依頼心や救援や、いらざる誇示やヤユを——要するにははっきりと管理状況下であることを意識し、感取してすごすということとなります。明言するならば、学校や学級というところは、子どもの「遊び」を展開するにふさわしい場ではなく、むしろあたりまえですが、「教育」展開をするようにしつらえられ、整備されている場であるということ。ことを教師自らがわきまえておかなければなりません。したがって、前記した「遊びに似て非なるもの」というアイマイさと、不適な場においてふさわしくないものをするとする後めたさの、二重の足かせがあるということを、はっきりと念頭におき、甘さや浮わついた考えをすてなければならぬということになります。

### 遊びにおんぶするな

このことは、ただちにもう一つの重要な事柄を導き出してくれそうです。教師は楽しく明朗で、いきいきとした授業をより深く徹底するため、「遊び」のもっている長所をどう自らの系統的実践展開にとり入れ、消化できるかという態度で望むべきであって、授業がうまくいかない補填として「遊び」



で穴うめしたり、「遊び」欠如による家庭や社会の歪みを、セメテ授業時間中に回復しとり戻してやろうとすることは無理だということ。いやそんなことはない、「遊び」をとり入れてやったら、翌日から子ども達はいきいきとして、何事にも積極的にになり、目の輝きがまし、成績水準も向上した——という反論があるかもしれませんが、もしそうした変化がもたらされたとしても、それは「遊び」をとり入れたことによるより、今までテストや偏差値や成績などで抑圧され、うっ積していたものが、一すじの光によって解放感をいただき、あの先生がちょっと話せるようになったとか、少しは学校にも楽しみがあることを見出した喜びの行動反応と考えるべきでしょう。

要するに、子どもの「遊び」そのままを借用したり、活用するのではなく、「授業」を柔軟で个性的で活きたものとするこの、教師自らの素材として子どもの「遊び」を資料として見つめなおしたり、「遊び」の方法からモディファイできるものはないかと探し、「遊び」の世界にある子ども達の姿を観察して、子どもの真の姿や要求を確かめることに資するのが本筋となりました。

### 子どものさめた目を知れ

以上の二点は、つまるところ「教育」を完うせよ、筋を通せということ。正規の授業をやるうとすると、子ども達はアクビをし、いやがり、はり合いがなく、こっちも意欲がわかぬ、だから「遊び」で関心をそそり、歓心を買い———というのでは、寒心の至りとなります。よくボランティアや学



生達が、子どもの「遊び」を指導している様子を見ると、本人が相当楽しんでいるのにぶつかります。子ども達にとって前記したごとく、むずかしい顔をして監視や監督然としてにらんでいられたのではタマりませんが、さりとしていっしょにアドケなく行動をともしたりしているといっしょに笑いながらも子ども達の頭のなかには「このオッチャン、いい年してボクラといっしょに遊んでなんかいて、少々おくれてるんじゃないか。もっと大人らしいしっかりしたことをすればいいのに」という考えがよぎっているのです。自我の発生した三歳以降、子どもは大人をよく観察し、ならい、学び、はやく人間として自立しようという意欲にもえます。それがつれない親や無責任なテレビなどで、ゆがませられたり、はぐらかされることはあっても、成長してゆく過程では、それはどこかにちゃんとのこっているものです。それが反抗とか反発とか自己主張、あるいは嫉妬などの源となってゆくものです。そうした源は、当然さめた目で「遊び」に興じている大人を見つめることとなります。大人が子どものよきプレイメイトとなるよう努めたり、それができれば子どもにとってよいことをしたなどと思っていたのでは、それは大人の自慰行為どころか、当の子どもからさえも相手とされなくなってしまう。ですから大人は、子どもに腰のまわりに群がられ、抱きつかれ、慕われてもそれだけで得意になっただけでいいのです。そうしたスキンシップも、直接的愛情表現や交流も、十分心得たうえで、それはそれとして適切的確に処理するとともに、大人であり、教師であり指導する者としての立場をもたなければ大人ではなく「大人になりそこなった者」となってしまいます。このことを放棄したの



では、わざわざ「遊び」を（！）というはじめのすばらしい積極的な発想目的が極めておくれてあいまいとなつてしまします。

### 遊びをつづつても授業にならぬ

子どもの「遊び」が失われ、少なくなり、それによる問題や弊害が顕著となつた今、「遊び」の効用を十分認識してもらわなければならないが、その長所や影響を力説するあまり、「遊び」だけで子どもの成長が完うでき、遊ばせておけば子どもの発達は完遂されるような説は、もちろん正しくありません。このことはたとい数千種におよぶ「遊び」を全部熟知し、子どもの刻々の状況に応じ、巧みに次々と提示したり、やらせたりして、ときには草木遊びを、ときには体の遊びを、あるいはことば遊びをとつづつるうちに、「遊び」の各種をつづり、つなげ、アレンジしても、それだけで「授業」は全うできるものでないことを物語ります。「授業」には「遊び」にたいするのとはまた、別の視点と努力、理論と巧みさが必要となつてまいります。

たのしいいきいきとした、そして効果的な授業を全うするためには、①正しい授業目標、②適切な状況把握、③巧みな教育技術の三つがすくなくとも必要となります。

第一の正しい授業目標設定のためには、正しい教育理論や教育観がなければならぬし、そのための基本としての人生観や社会認識といった、教師の人間としての基本問題に「遊び」は直接関係すると



ころは少ないものです。あるとすれば、広い意味で人間というものと「遊び」についての哲学的考察という範囲でしょう。

第二の適切な状況把握については、やみくもに正しいことだから千万人といえどもとして、頭を岩にぶちあてるのではなく、親たちの支持の程度や社会の流れをよく見極め、それが全然ないならばその芽をはぐくむための、少ないならばより多くするための努力や方策をたてるためであって、努力も働きかけもせず、委縮や退却や日和見の言いわけにするためではありません。そしてこのなかで最も大きな対象として、子ども達の状況がどうなっているかに力が注がれねばなりません。身体的なこ



とはもちろん、心や精神的な面、家庭や社会との接触で、どんなことに興味をもち、いやがっているか、そのことの集団動向と個性的な面の把握が必要となってきました。ところが、なかなか子ども達はその真の姿を見せてくれるものではありません。「ひと言話してくれれば」と非行や自殺後に後悔されることが多いものですが、言葉を発してくれるなら、こんな容易なことはありません。そのわかりにくい真の姿をかい間みせてくれる、わずかな場が、「遊び」のなかにあります。なぜなら、そこは彼らにとって自由であるからです（こうした意味もあって、この解放区に大人が侵入するときの、注意しなければならぬ汚染や拒否反応は前



述した通りです。「遊び」そのものの動向や流れを検討することで、子ども達の動的な姿を知る手がかりが得られるし、遊んでいる個々の子ども達の状況を、ゆっくり観察対比するとき、教場ではわからなかった子ども個人の性格や能力を知ることが出来るものです。第二の項目「適切な状況把握」のため「遊び」はおおいに役立つものとなるでしょう。

### 遊びから技術を盗め

第三の巧みな教育技術は、教師自らの能力におおいに関係します。そのなかには、声が大きいとか、背が高く身軽であることがよいとか、やや教師の資質に関与することも無視できませんが、なかには、表情や身ぶりをそえて子ども達の顔をみながら示すとか、五行以上連続するときには、行かえを行なったり、段落をつけたほうがよいとかいう、ちょっとした「テクニク」のつみ重ねが非常に役に立つものです。便利帳のように、そうした役にたつ小技術を自分でメモし、考案されている先生もおられますが、子ども達にはどんな言い方や述べ方が一番わかりやすく、どんなものや形や現象のどんな点に心をよせ、どんな工夫や考えでそれをのばそうとするのかという具体例があると、さらに役立つことでしょう。「遊び」のさまざまな実例やその内容、変化状況をさぐると、それらはこうしたものの結晶であることに気づきます。すなわち「遊び」は、こうした巧みな教育展開を行なうための、子どもの側から展示開陳された技術総覧というべきものなのです。